

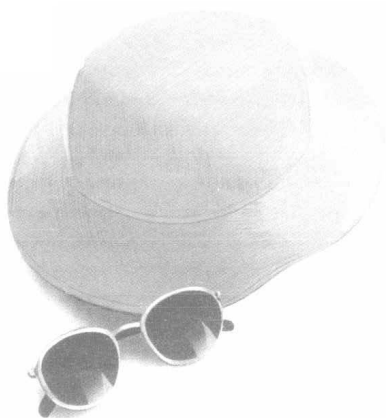
利根川 裕

それぞれの
方舟



れぞれの方舟

利根川
裕



それぞれの方舟

発行日 一九九〇年六月二十四日 第一刷

著者 利根川裕

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三・二一 千二五二

〇三二九九二五四二一八(販売直通)

〇三二九九二四八〇(編集直通)

東京二一九五六七〇番

振替 図書印刷株式会社

印刷 小高製本工業株式会社

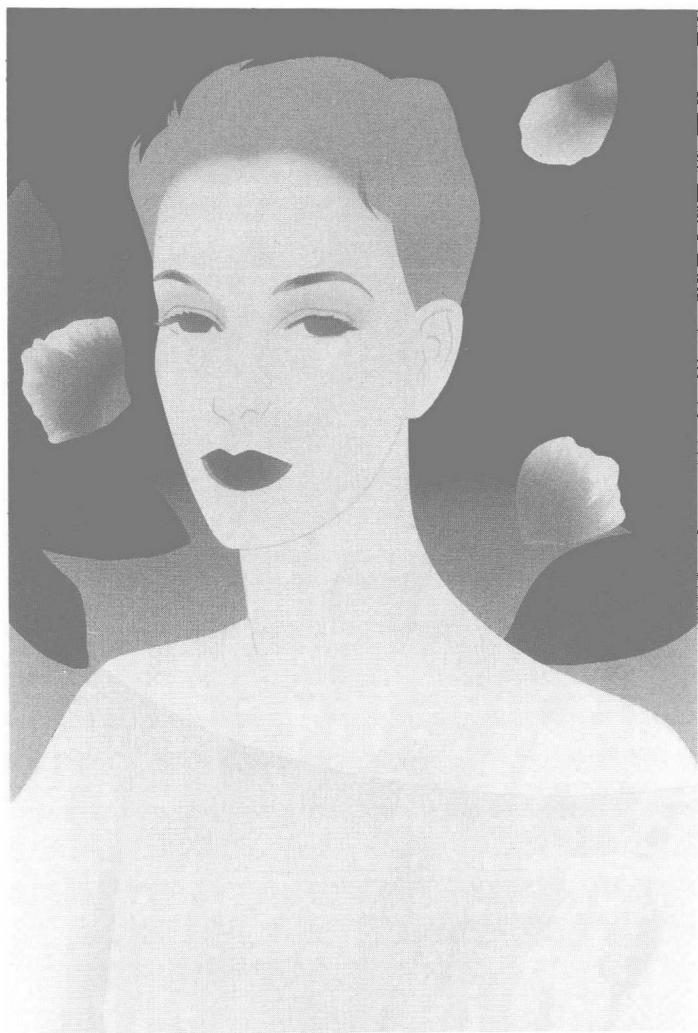
それぞれの方舟 目次

方舟の章	5
波音の章	49
波瀾の章	103
逆波の章	161
船出の章	199

イラストレーション／升
ブックデザイン／鷺
たか
隆

それぞれの方舟

はこぶね
方舟の章



「とにかく、JR線でも地下鉄でも何でもいいから、降り立ったところでタクシーを拾って、アークヒルズ、といえぱいいの」

そういう星野美香の声が、電話のなかで踊っている。

（美香の電話って、いつも彼女の歩きかたと、ぴったり）

藤田真弓は、美香からの電話口で、よくその歩きかたを思いうかべる。すこし外に向って開いた爪先。その爪先をぴんとあげて歩く。その足どりが、シルクロードの奥地かどこかの民族舞踊に似たように弾んでいる。

その弾んだ声で、

「えっ、アークの地番？　さて、と。ああ、六本木一の一。でも、そんなの、いらない。

いまいったとおり、とにかくタクシーに乗ったら、アークヒルズ、で大丈夫。もし運転手さんがグズグズいったら、そんなクルマはすぐ捨てて、つぎのタクシーに乗りかえるの。もし万一、その運転手さんも不思議そうな顔したとしたら、アークヒルズは一夜にして焼け落ちて灰になったか、それとも、あつという間に天国か地獄かに引越してしまった、ということね」

「ふ、ふ、ふ」

「あなた、何か笑っている？」

藤田真弓はまた、美香の電話の声でその歩きかたを目にうかべていた。地下に埋まっている電話回線は、一本のケーブルに何千という線が走っているのだ、とか。その線という線に、人間の声が入りこんでひしめき合っている。とんでもない雑沓^{ざうたう}。

そんななかで、きつと星野美香は、するすると闇の雑沓をかきわけて、小躍りするように自分の乗っかる回路を素早くキャッチする。なんだか、彼女のかける電話には、お話し中、がないようだ。

と思ったとき、藤田真弓は、

「ふ、ふ、ふ」

と笑っていたのだった。そんな真弓の反応にこだわることもなく、美香の声が勢いよく伝わってくる。話の運びが早い。

「そのアークヒルズのなかの、A N A ホテル。全日空ホテルね。そこにあなたの部屋をとって

おいたよ。ここだったら、わたしのテレビ局のすぐ隣りで便利だからね。そう、五時には行けると思う。五時。ホテルのラウンジで。うん、アトリウム・ラウンジといったかな。それから、小田亜紀^{あき}子^こさんにも連絡しておいたわ。彼女、会議か会合があるとかで、だめかもしれないけど」

五時、という約束の時間には、まだ間があった。

ホテルの部屋に入った藤田真弓は、まずゆっくりと、ぬる目のシャワーを浴びた。

結婚してから、ひとりでホテルに泊るのは、これがはじめてであつた。そのことが、彼女を落着かせない。そつと、男と会う予定があるというわけでも、さらさらないので。

真弓の住んでいる新潟市から東京までは、上越新幹線でほぼ二時間。

遠くない、といえば、少しも遠くない。事実、年に四回か五回は、東京に来る。がそのときは、弁護士をしている夫の重雄も一緒、それにふたりの子どもたちも。そして、泊るのは、夫の妹の婚家先と決まっている。妹夫婦の住んでいる東京の家の名義は、重雄の父になっている。ここ三年ほど前から、ほとんど仕事から退いている父であるが、やはり弁護士であつた彼は、娘が東京で結婚するとなると、ときには自分たち老夫婦も気楽に泊りたいからと、かなりの住宅を買つて、そこに娘夫婦を住まわせることにした。

家主である親夫婦が、たまに東京に出てきて娘のところに泊るのだから、いかにも気楽には

違いなかった。

息子の重雄も、東京へ来るたびに、父親とそっくりの気楽さを楽しもうとしていた。そして重雄は、それが妻の真弓にとっても気楽なはずだと思ひこんで疑わな性質の夫であった。

だから、こんど真弓たちの大学の主任教授だったK先生の七回忌で、これを機会に同期のゼミ学生が集まろうという通知をもらったときも、夫は気軽に、

「ああ、妹のところに泊ればいいさ」

と、こともなげにいった。

「だって、こんどは私ひとりよ」

「蒲団ひとつ敷けばいいんだから、なお簡単じゃないか」

「だって、私ひとりよ」

と、真弓はもう一度いつてみた。

「女ひとりの東京行きなんだから、なおさら、あそこしかないんじゃないか」

（この人は、どうして、こう素直に単純に出来ているんだろう。小姑と嫁の關係が少しもわかっていないらしい）

真弓はもう、そのことで夫と話し合いをつける気がなくなつて、星野美香に電話したのであった。

いま、バスルームのなかで、真弓はシャワーの温度をあげてみた。栓をいっぱいに開いて、

湯量をも増した。勢いづいた熱い湯が、痛いくらいに彼女のからだを刺激する。シャワーを首もとから胸にあて、それから乳房にあてた。荒々しく乳房が火照ってきて、これまで知らない感覚が乳房のまわりに拡がっていった。

（たったひとりの不倫ね）

そんな、へんな気持ちだった。

女がたったひとり、誰からも見られない密室にいたら、いったい何をするものだろう。

バスルームから出た真弓は、バスタオルで蔽っただけのからだで、ベッドに仰向けに寝て、天井を見つめたまま、そんなことに空想を走らせていた。

肌理細かで、ほどよく脂ののつたこの肉体を活用すれば、世界を征服することだって不可能ではない、と思つてみたい。でも、女が世界を征服するって、具体的にはどういうことなのだろう。

私の取りしきつているサロンがあつて、そこに、いま一番の評価を集めている詩人や音楽家やら俳優やらが、やつてくる。むろん、みんながみんな、私の魅力の虜。私という女性が存在するだけで、それらの人たちがひとり残らず、自分の芸術の靈感を感じとって、一世を風靡する大芸術を創りあげる。つまりは、私が大芸術の泉。私がこの世を征服しているのだ。

でも、これ、古いなあ。古典的すぎる。サロン趣味に傾きすぎる。

それよりもいっそ、今世紀最大の秘境開発大土木工事の現場に女ひとり乗りこんで、猛獣の

ような目つきをして埃と汗にまみれた男たち、男という男のすべてに私を与えて、彼らをひれ伏させる。

でも、これ、マンガだなあ。劇画的すぎる。

とうとう真弓は、

「あつはっは」

と、大声あげて笑いだした。そうだ、きつと女たちは、たったひとりでいると、こうして笑いだすに違いない。この笑い、男たちにわかるかな。わかってくれた男に出会ったことはないようだ。

夢の呪縛から解かれたように、彼女はベッドから起きた。

そして、やはりバスタオルをまとっただけで、ベッドの脇の鏡の前に腰をおろした。かなりの時間、鏡のなかの自分を見つめてから、化粧にとりかかった。

そうだ、女は化粧する。これから会う人たちに見せるためにも化粧するし、誰も見てくれない自分ひとりのためにも化粧する。

化粧の時間が長かった。自分が自分に戯れるための化粧。自分が自分でなくなるための化粧。そして、遊びにしてみた厚化粧をおとしてから、新潟の家へ電話をいれた。四時半。上の女の子が、ピアノのレッスンが終って家に着く時間である。

ママのいないきょうの夕食は、パパがふたりの子連れて、どこかでたっぷりご馳走するこ

とになっている。どこの店にしたのかしら。

新潟の真弓の家には、電話が三本ある。一階の藤田法律事務所に一本。そこから廊下づたいになっている両親の住居部分に一本。そして、真弓たち家族四人のいる二階に一本。

二階へ電話をいれた。呼出音が鳴るだけ。ペランダから出て、屋上にでも行ったのかな。少し時間をおいて、もう一度。やはり呼出音が鳴るだけ。ふうっと、不吉なことに思いがゆく。何かの事故で、まだ帰らないのか。それにしても、下の子だって電話には出てくれるはずなのに。

法律事務所のほうに電話をいれる。事務をまかせている女の子が出て、

「先生は、お出かけです」
とのこと。

両親のいる一階のほうに電話する。すぐにつながって義母^{はは}が出てきた。その電話のうしろで、ふざけ合っている子どもたちの声が聞こえる。ほっとしている真弓に、義母^{はは}の上機嫌の声が聞こえてきた。

「今夜は、私のお料理で、みんなが食卓を囲むことになったのよ」

真弓はがつくりした。自分が裏切られているように、みじめで悲しくなった。そして、何かムラムラするものが立ち騒いだ。

アトリウム・ラウンジは二階。

広い空間。三階までの吹き抜け。その三階の高さから、滝、といつてはいけなかな、とにかく水が二階へ流れ落ちてゐる。その水音があたりの騒音を吸いこんで消してくれる。

約束の五時に、真弓はこのラウンジのテーブルに着いた。星野美香も小田亜紀子もまだ来ていない。

アークヒルズ。ここはさながら人工都市。ホテルの脇には、三十八階のオフィスビルが建っている。なんでもそこには、十七の外国企業が入っていて、そのうちの十一社が銀行や証券などの金融機関。バンク・オブ・アメリカ、ドイツ銀行、クレディ・スイス、ソロモン・ブラザーズ、ゴールドマン・サックスなどなど。

それに並んでアークヒルズ・マンション。そしてテレビ局があり、その隣りにサントリーホールがある。

十年ほど前、藤田真弓が東京に住んで大学に通っていたころ、六本木や赤坂へは、なんども来たことがある。が、いまこの新タウンの出来たあたりは、足も止めないで素通りしたところだった。

すぐその交差点の地名が、溜池^{あひけ}。いつもにぎわっている六本木の中心地から坂を下ると、この溜池につながる。その地名のとおり、ここは水が溜^{くぼ}って池になるような窪地^{くぼち}。そうだ、そういえば、新タウンのある地帯は、谷町と呼ばれていた。